

2017年夏の日本超音波医学会理事会で第93回学会の会長を仰せつかって以来、様々な視点から準備を進めて参りました。工学基礎領域の会長としては、2009年東京開催の椎名毅会長以来11年振り、また東北地方（仙台）での開催は、1982年の田中元直会長、1987年の中鉢憲賢会長、1997年の棚橋善克会長以来23年間振りとなります。本学会東北地方会を中心に、最近の様々な危機感を共有している多くの先生方と相談し、本学会の主題を「原点回帰」と設定しました。

本学会の初代会長、菊池喜充東北大学電気通信研究所教授をはじめ、多くの先生方が超音波医学に対して真摯な姿勢で取り組まれ、現在の世界の超音波医学の礎を築かれました。これら黎明期の研究者は、「研究の面白さと蘊奥」を理解し、それらを日夜励む研究の「原動力」にされたと言えます。しかし、これらの研究者の多くが定年を迎え、本学会にとって今後は予断を許されない重要な時期と言えます。

本学会の学術が、各臨床領域の他学会に埋もれず、さらに新しい概念・革新的技術などを持続的に創出して世界を先導するように発展するには、本学会の特長である、臨床領域と工学基礎の融合の深化、臨床応用のための企業との連携強化とともに、大切に抱卵してきたアイデアに関する研究発表の「心躍る感覚」を、次世代が経験する「場」を設けることが必要です。ここに、本学会の「原点

超音波医学が今後進むべき方向性

回帰」の意味があります。面白い研究の種が至るところにあり、自ら実験して解決した黎明期を想起し、「学術集会の本来の意義」を改めて見つめ、研究発表と熱心な議論を尊重するという「学術重視」が、次世代研究者の「動機付け」と学術や医療の持続的発展には不可欠という結論を確認した次第です。

学術集会での研究成果発表の意義は、①最先端研究の紹介によって参加者が知的刺激を受けることだけでなく、②昼夜ない苦勞の末に得た素晴らしい研究成果の喜びを、発表者が聴講する方々と共に分かち合うこと、③その発表に対し、厳しくとも有意義な議論を得て次の研究に繋げること、にあります。これらは当然なことですが、次世代育成という観点からは、最近の多くの学会で②③がやや疎かにされているように感じます。

したがって学術集会の最重要点は、「一般」の研究発表と質疑応答にあると言えます。本学会集会では、その「場」を整え、発表のステイタス向上を目指します。まず、①特別企画を独立させず、各領域の一般セッションに「招待講演」として組み込み、一般の演者にも同じセッションでの発表と議論の場を設定します。これによって会場の並列数も減ります。②一般演題と症例報告を区別し、また口頭発表の持ち時間を長く設定します。③多くのセッションでは、座長による数分間の「基調講演」を設け、当該セッションの目的や背景・現状を、その分野の専門家だけでなくも理解することを目指します。④査読によって面

白いと判断された一般講演にスポットライトを当て、「注目講演」として倍の持ち時間を割り当てます。⑤工学系の研究が論文発表で終わらず臨床現場に入り込めるよう、工学系・臨床系が共に発表し議論できる「合同セッション」を多く設けます。そのため研究キーワードを整備し、工学系も該当する臨床領域のキーワードを選択して頂きます。それは、本学会の特長が、基礎領域と臨床領域が同じ研究テーマに関して議論し、さらに連携の種を見つける点にあり、これが、医学系だけ、工学系だけの学会にはない、本学会の生命線と言えるからです。さらに、⑥展示会やランチョンセミナーには、従来の臨床機器などのメーカーに加え、基礎研究に必要な研究機器を提供するメーカーにも参画して頂きます。

これだけ科学技術が発達しても、生体には人知の及ばぬことがまだ無限にあります。その生体の奇跡の仕組みを解き明かすための新しい精緻な計測や画像化・診断の研究も、積極的に働きかける超音波治療の研究も、次代を担う研究者に強い「動機付け」を与え、期待できます。発展著しい人工知能など他領域の技術の導入、ハードウェア技術の発展に基づく超音波エコー装置のポータブル化による新領域への適用などの研究発表は、今後の学術の裾野拡大にも繋がります。

こうした、古くて新しい取り組みによって、やがて次世代の優れた研究者が育ち、本学会の学術が持続的に発展することを期待しております。

巻頭言

東北大学 日本超音波医学会第93回学術集會 会長
大学院工学研究科/医工学研究科 教授

かない ひろし
金井 浩

